

未来の小説家が…。

うちの娘が5才くらいの時、ポケットに石を持ち歩いてはベランダのところに並べている時がありました。私はお洗濯のたびに「汚いからやめなさい」と注意するのですが、それでも時々ポケットに入っていたので、ある日ものすごく、怒ったらそれ以来、石を拾ってポケットに入れることはしなくなりました。しばらくして、娘のお友達のおかあさんに「Mちゃんのお話楽しかったわ～。想像力豊かよね。以前ね、お話のできる石の話をしてくれたのよ。すてきな冒険物語だったわ。皆に勇気と希望を与えるそうよ、だから頑張れるのですって」私は、はっとしました。私が捨ててしまった「あの石」のことだとすぐわかったからです。その時初めて娘が石を大事そうに持っていた理由がわかったのです。その頃の娘は、まったく手のかからない子どもでした。妹が生まれたこともあり、お姉ちゃんとして頑張っていたのかもしれませんが。きっと寂しかったのだと思います。あのポケットの石は娘を楽しませてくれる存在であり、自分をなぐさめてくれる心の友だったのだと思います。そして、石をきっかけにどんどんと自分の中のイメージが広がり、想像力を育てていたのでしょう。その頃の私といえば、二人の娘を育てるのに一生懸命でした。良いといわれる本はすべて読み、積極的に講演に出向き、子どもの進路研究にはとても熱心でしたが、肝心の娘の気持ちに沿っていたかといえば程遠く、どちらかといえば自己満足の世界でした。子どもがその子らしいどんな才能を伸ばしたいのか、どんな気持ちを抱いているのかまるでわかっていなかったのだと思います。小さいながらその頃の娘の夢は小説家になることでした。私は未来の小説家の小さな芽をつんでしまったのではと、とても悲しい出来事として今でも後悔しています。

ただ、そんな娘も今や18歳。小説家の道は目指してないようですが、今でも時々、想像力をつかい、周りの友達を笑わせ、楽しんでいるようです。

子どもはみな天才

イタリアのモンテッソーリ女史は子どもの教育に多大なる影響と功績を残した人の一人です。彼女の書の中にも次のような内容のことが書かれていました。ある親たちが銀行の前で立ち話をしていた時のことです。しばらく自分たちの話中に夢中になっていた母親たちが、ふと自分の子供たちがしていることを見て仰天しました。何と子どもたちはマンホールの上についた土をいじり、さらにその上に小石を並べ、それらを丁寧に1つ1つマンホールの穴の中に落としているところでした。驚いた母親たちは「まっ！なんて汚い。おやめなさい！第一、マンホールの中に石を捨てたりしてはいけないの」。その場に居合わせたモンテッソーリ女史は「また、これで未来の科学者が失われた」と残念に思ったそうです。どうやら、子どもたちは小さな小石の1つ1つから丁寧に土をとり除き、小さい順に並べ、小さいものから順にマンホールに落とし、下に落ちるときポチャンする音に聞き入っていたようです。さながら実験中といったかんじだったのでしょいか？子どもが何に興味をもちどんな発見をしているのか親の目には見えないのです。知らないうちに私たち大人が、そういった子どもの目を失い社会と上手に付合うことに一生懸命になってしまったのでしょうか。

想像力とは自分を幸せにする力

私たちは日ごろ様々なかたちで想像力をつかってイメージを描いています。ある意味で知らず知らずのうちにそれに左右されているといっても過言ではありません。例えば、家族や恋人同士で食事に行くときレストランを選ぶという場合にもイメージから分類して、その時の気分や味覚に合わせる、店の雰囲気、食べ物の香りや匂い、値段の幅、場所などを検討しています。また、ひどく落ち込んだり、大切な仕事を失敗したり、苦しいとき、悲しいとき、私たちは想像力をつかい自分の気分を変えることにより切り抜けています。最近、子どもたちの相談にのっていると、子どもたちの想像力が乏しく、人に気持ちを察したり思いやったりする能力も乏しくなり、人間関係が上手にできないことが多いのではと感じます。子どもだけではなく、大人にとっても、想像力とは自分を助ける力なのです。積極的にイメージを使えば、夢実現や健康な人生、今よりもっと素晴らしい人生を自分の手で設計することができるのです。アートセラピーでは心に浮かぶイメージを絵にすることで、想像力を育てたり、自分の可能性を絵から読み取ったりしています。想像力を育ててより豊かな人生をつくってゆけたらいいですね。